

## [ エッセイ No.22 手紙と“タイパ” ]

その頃、私の好きな人は、日本から9000km以上離れた、遠い彼方の異国の地にいた。心を伝える手段は、手紙のみ。国際電話は可能は可能だったが、直通はかなわず、しかも3分間4000円くらいしたし、時差もあった。個人のメールや携帯電話など、まだ存在しないに等しい時代。手紙が相手に届くまでに1週間ほどかかり、お互いのやり取りが行き来するには3週間近く必要だった。

今の人、特に若い世代の人たちには、信じられないばかりでなく、とても“忍び難い”状況だろう。なにより「待つ忍耐力」が必要だった。でもその分、心のドキドキ感は、今とは比べものにならなかったのではないかしら。簡単に人と繋がることができないう時代だった。でもその分、叶った時の喜びの大きさは何とも表現し難い。(ヤバーい、ヤバーい、ヤバーい、エモくってめっちゃ嬉しい！)

毎日何回も覗きに行く郵便箱。家の中にいても、体中の神経がヒリヒリと尖って耳に集中しているような気がする。ある日、聞えるはずもないコトンという音とともに、絵葉書が一枚届く。何千キロも旅をして届いた心を、それはそれは大切にそっと撫でてみる。ほんの何行かの言葉の合間に、もっとたくさん違うものを探す。絵葉書に初めて見るドイツの風景、それはローテンブルグという町の小さな街角の石畳と建物だった。その写真に、好きな人の姿をのせて想像してみる。この街を歩いているのね、このおとぎ話に出てくるようなお店で食事をしているのかしら。そんな想像の一時が大きなときめきでもあった。

今は「伝達物体」、つまりスマホや PC が発達して、確かに便利だし、ほとんどどんな時にでも、瞬時に相手に言葉や写真や動画を届けられることができる。他の人たちに知られないような形での“交流”も可能だ。やさしい言葉もケンカも、問いも涙ものすごい速さで、直接相手に伝えることができる。ただ、行間に込める想像力や思いは必要とされない、というか、あまり評価されなくなっているかもしれない。「タイパ」とかいう言葉が表す状況が必要とされる事態も、現代にはもちろんあるだろう。いかに速く、いかに便利に、いかにわかりやすく、状況や気持ちを伝える。それも“バエル”とか言う、摩訶不思議な流行り言葉の背景とともに。(なぜ、もともとの“ハエル”、つまり“映える”ではいけないのだろう！?) 相手に送る写真も“盛られ”、人工的に不自然な手がやたらと加えられる。「本当の姿」は、“けむに巻かれている”方が望まれるということか？

若い世代の人には、映画や本なども「あらすじ要約もの」が好まれると聞いて、愕然とした。タイパのためだそう。そんなに何も“味わう”ことを知らずに、瞬間の楽

しみだけで時間を過ごすことが大切なのだろうか。3Dの世界が楽しめる一方で、ラインのやりとりは、私には、とても平坦な2Dの世界に映る。かろうじて「スタンプ」でちょっとした気持ちを補うことは可能だろうか。

読書や映画を観ることは、想像力を養うことだ。即物的にすぐわかりやすいことばかりに触れるのではなく、“メンドクサイ”ことを考える。これ自体は確かにメンドクサイけれど、習慣になればたいしたことはないし、その作業に喜びも見いだせる。どうやって言葉を紡いだら気持ちが一番伝わるだろうか、とか、どんな風に書こうかとか、いろいろ悩んだり考えたりするのも、実は楽しい。

人生100年と言われるようになったが、溢れる情報に日々や生活が侵されて、心の奥に何が秘められているかも感じられないまま、“浅い喜び”だけに包まれて死を迎えてしまうのだろうか。なんかちょっと残念！ 美味しいものが大好きな私たち、本だって、コンサートだって、映画だって信じられないほど「奥深く美味しい」のだ。

フランツ・カフカという作家がいた。現代文学の代表的作家、と言われるが、役所に就職して働きながら、小説を書いていた。だけれど小説ばかりでなく、彼は様々な相手にもものすごい量の手紙を書いている。その頃はまだすべて「手書き」だったわけだから、仕事の傍らいったいつ、どんな速度で書いていたのだろうか。

とても有名だが、「ミレナへの手紙」という私の大好きな本。恋人、とは簡単に言えない。知り合ってから会う機会も多くないのに、長い年月、深い“友情”によって心の奥底で深く結びついている。内容は他愛もない話も多いが、彼にとって手紙を書くこと自体が、“亡霊の前に”自分をさらけ出すことだという。日常的な描写も多いのだが、読んでみると、まるで自分自身が彼に語りかけられているような感覚がしてドキドキする。時には、一日2回も手紙を送っている。

フェリーチェという婚約者にあてた手紙は、「ミレナへの手紙」の3倍はある。それ以外に、家族や友人に宛てた手紙も多い。現代の「ライン」の世界に支配されている若者たちに、彼の手紙はどのように映るだろうか。

実は、私の(元)夫もものすごい「手紙魔」だった。初めのころは私にだけ「ラブレターをくれている」と思っていたのだが、結婚後、いろいろなところに一緒に演奏旅行に行くと、いつも両親やら兄弟やらに、簡単なハガキにせよ、手紙を書いていた。我々が知り合った頃は、まだ携帯電話も普及していなかったし、PCでメールを送り合うこともなかった。幸いなことに！

彼はほとんど毎日、それも速達で手紙を送ってきた。毎回10枚以上に渡るドイツ語の手紙…。慣れない“筆記文字”を一字一字読み下すことも大変、10枚以上びっしり書かれたドイツ語の“教科書”を読みこなすのも大変、そして何よりそれに返事

を書くことが、私にとっては猛大変！ 拙いドイツ語で何時間もかけて必死に便箋一枚を埋めても、「なんでこんなに短い返事！」としょっちゅう不満を言われた。ドイツ語の辞書はボロボロになった。もちろんそれによって、私のドイツ語が上達したことは否定できないが。

もしあの頃、現在の「メール」が普通に存在していたとしたら、私は毎日、いったいどれだけの量のメールを読んで返事を書かなければならなかっただろう！ 「幸いなことに」手紙の可能性しかなかったから、たとえ日に2通の手紙が来ても、なんとか“普通に生き延びる”ことができた。

ベルリンの音楽学校を卒業したあと、「自分の進む道を探してみなさい」と、パリやミュンヘンの国際コンクールを受けることを、当時師事していた先生に勧められた。元夫とは、そのミュンヘンのコンクールで知り合ったのだが、音楽的にはまさに「一目惚れの相思相愛」、コンクールが終わった翌日から「手紙爆弾」が始まった！ フランクフルト近くの先生の家で、一時期“下宿マガイ”に住まわせていただいていた私と、ウィーンに居を置いていた彼を結ぶものは、とにかく手紙。大きな庭のあるドイツの田舎の一軒家、庭先の入り口で、毎朝6時半から7時半の間に配達人がベルを鳴らすと、雨の日も風の日も先生が出て行って、その「速達」を受け取り、朝食のテーブルに置いてくれた。

「ユミコ、またお手紙よ」

今振り返ると、先生から一度も、私への早朝手紙に「お小言」を言われたことはない。むしろ、微笑ましく見守っていてくれた、という感じだった。2, 3週間そんな日々が続いて、さすがに私は返事の中で、「先生に毎朝7時頃に速達を受け取らせるのは申し訳ない、お願いだから、普通郵便にしてください」と頼んだ。（彼はもちろん、ドイツでの速達が朝一番に届けられるとは思ってもよらなかったらしく、先生にただひたすら謝ってほしいとのことだった！）

何故速達？！ 自分が思ったことや考えたことを、できるだけ速く私に届けたかったから、というのがその理由らしかった。今風に簡単に言うと、「タイパ」だ。ラインだ。でもやはり、「手紙」を受け取り、どんなことが書かれているかと胸をときめかせて封を切る、あの独特の緊張感と嬉しさは、スマホメールには代えがたい。

ドイツ歌曲の王と呼ばれるフランツ・シューベルトの作品に、「鳩の使い」という曲がある。ザイドルという詩人のテキストにつけられた歌だ。昔の日本でも、鳩に手紙をつけて飛ばせたらしいし、ヨーロッパにももちろん伝書鳩がいたが、この詩の鳩は「鳥」ではない。詩の最後に明かされる。

「思いを君に忠実に届けてくれる僕の伝書鳩は、この胸の憧れと思慕」と。

